訪問マッサージ　三ツ星治療院
TEL：０７０－５０２０－６１６４
メール：m3204@y-mobile.ne.jp

いきいき！ニュースレター ９月号

「さする」「動かす」が患者さんの体を変える

たびたびご紹介している「さする」の手技ですが、印象として「地味でもの足りない」と思われがちな手技でもあります。
見学に来られたケアマネージャーさんから、「これが効くの？」と言われたことも。
（お気持ちはよく分かります。とても地味な動作なのです。）

マッサージの「さする」には、押し付ける力を加えています。
押し付ける力は、患者さんの筋量や状態によって加減しています。
効果が出せて、かつ副作用のない圧を加えられると、患者さんの体が良くなっていきます。

良くなってきたときに取り入れるのが「動かす」手技です。専門用語では「揉捏（じゅうねつ）」とも言います。
皮膚に当てた 4 本の指を円を描くように回転させて、押されながら動く感覚を与えます。
こちらも「さする」同様、気持ち良いと感じられる刺激量で行います。
「さする」よりアクティブな動きになりますが、副作用が少なく、患者さんの身体が受け入れやすい手技です。

マッサージに慣れている患者さんの受けた印象

以前はご自分でマッサージ治療院に行き、施術を受けていたという男性患者さん。
くも膜下出血を起こし、退院されて訪問マッサージを受ける事になりました。

強押しに慣れていた患者さんは、「さする」「動かす」のみの私の施術にはじめ戸惑っていましたが、マッサージを受けて 3 回目のとき、「始めはこんな弱くて効くのかと思ったけど、後が楽なので、今の自分には合っているみたい」と、感想をくださいました。

マッサージは痛くていやだと思っていた患者さん

以前、マッサージを受けたことがあるが、力強く押されて揉み返しが起き、逆に背中腰が痛くなってしまったことのある女性患者さん。
その記憶があり、当初は「マッサージは嫌だ」と仰っていました。

「刺激量は身体に合ったものにしているので痛みはない」とご説明し、ご納得いただいたうえで施術しました。
「これくらいの刺激なら安心」と仰ってくだいました。
「手に何か持っているみたいに温かくて気持ち良い」とマッサージを気にいってくださいました。

訪問マッサージと普通の人へのマッサージは別物

私の場合、訪問マッサージでは指圧などの「押す」手技はほとんど行いません。
私は「さする」「動かす」が 9 割以上を占めています。

普通のマッサージと訪問マッサージの「マッサージ」は、内容が違います。
マッサージに求めるものも違うので当然なのですが、理解していないと副作用の原因になります。

無理な圧を加えられると、筋肉は硬くなりますが、「さする」「動かす」で適切な圧を加えると、軽く感じたり、すっきりした感覚になります。
身体をいたわって大事にケアするのが、訪問マッサージの手技だと思っています。
そして「さする」「動かす」は、副作用なく患者さんの身体を変える、訪問マッサージの万能選手です。

レビー小体型認知症 と パーキンソン病

「レビー小体型認知症」と「パーキンソン病」、診断名からみても一見全く別の病気のようです。
しかし、両方ともレビー小体が原因で起こる病気です。

「レビー小体」とはたんぱく質の塊です。それが神経細胞にでき、神経を傷め死滅させてしまいます。
レビー小体型認知症では、大脳皮質にできて認知機能を低下させ、パーキンソン病では、脳幹にでき運動神経を低下させます。

レビー小体型認知症とは

レビー小体型認知症という診断名が確立されたのは 1996 年のこと。比較的新しい病名です。
認知症とはいえ、認知障害が目立つようになるのは病気が進んだ中期以降であることが一般的。
それだけに、対処が遅れて病状が進んでしまうこともあり、気づいた時には生活の質を大幅に落としてしまっている、ということがあります。

初期の症状としては、幻視・誤認があります。ないものが見えたりし、妄想に発展することもあります。
アルツハイマー病でも幻視はありますが、ぼやっとしたものに見えるそうです。
レビー小体型認知症は、はっきりと、ありありと見える、という特徴があります。

あとはパーキンソン症状（筋肉のこわばりがあり、身体がうまく動かせない）や、就寝中に叫んだり暴れたりといったレム睡眠行動障害が起きることがあります。

全体病としての「レビー小体病」

大まかにいえば、レビー小体がどこに多く出来ているかの違いで、症状や病名が変わってきます。
しかし、どの病気でも他の部位にレビー小体が広がる可能性はあり、厳密には区別しにくいところもあるようです。
最近は、レビー小体型認知症もパーキンソン病も、「レビー小体病」として全身病と捉えるべき、という考えが広がっています。

幻視をみる患者さん

以前受け持っていた女性の 70 代前半のパーキンソン病の方です。
「夜に誰かがいる」と騒ぐことが続くため、ご家族が睡眠をとれず苦労されていました。

また、パーキンソン病と脳梗塞の後遺症を患っていた 70 歳代の男性患者さんは、
「足が焼けているような感覚で眠れない」と仰っていました。（この感覚を訴えた方は今までこの方だけです。）
そして「夜中に人がいる」と幻視を訴えておられました。

レビー小体型認知症の診断を受けている男性患者さんは、「あそこに人がいて自分を見ている」と指さしておられました。くっきり見えているという印象でした。

また、レビー小体型認知症の女性患者さんは、初期のころ幻覚や夜中に叫んだり、ということがあったようですが、3 年たった今は落ち着いてきて、夜騒ぐことは少なくなったそうです。
今は筋肉の緊張が強く、転倒が多くなっています。転倒が心配で、ご家族の心労は今も続いています。

パーキンソン病の患者さんが認知症になることもあれば、レビー小体型認知症の患者さんにパーキンソン病が現れることもあります。
状態の変化は見逃さず、医師に伝えることが大事です。
身近な人が病気の特徴を理解することで、早くに病に気付くことができ、症状の改善や進行の抑制に繋げられると考えます。

★三ツ星治療院です★　お気軽にご相談ください。メールでのご連絡も大歓迎です。
TEL：０７０－５０２０－６１６４　　メール：m3204@y-mobile.ne.jp